

## イロニー的な主体としてのウィトゲンシュタインについて

- WS 「ウィトゲンシュタイン：その生と思想から受け取りうるもの」 提題要旨 -

鬼界彰夫

### 1. ウィトゲンシュタインから我々が受け取りうるものとしての「哲学の仕方」

「ウィトゲンシュタインから我々が受け取りうるもの」とは、彼以外からは受け取ることのできないもの、あるいはできそうにないものでなければならぬだろう。さもなければとりたてて「ウィトゲンシュタインから」と言う必要がないからである。そして我々が彼からしか受け取りえないものとは、他の者にはない我々を惹きつける彼独特の特徴と深く結びついている何かでなければならぬだろう。こうした観点からウィトゲンシュタインという哲学者を改めて見つめてみると、私が彼に惹きつけられる最大の特徴とは、その不思議な、あるいは逆説的な「哲学の仕方」である。確かに彼の哲学の「内容」、「思想」は独創的であり、深遠である。しかしそれは「前期ウィトゲンシュタインの思想」、「後期ウィトゲンシュタインの思想」などとして言語化できるものであり、その限りにおいて他の人間が復唱しうるものである。現にそうしたウィトゲンシュタイン主義者は多く存在する。しかし彼らの中で、ウィトゲンシュタインがそうであるように私を惹きつける者は一人としていない。このことは、私が惹きつけられているのは彼の思想の抽象的内容ではなく、彼がその思想を世と人々に伝えた独特の態度、スタイル、方法としての「哲学の仕方」であることを示している。私の提題の主旨は、この「哲学の仕方」の正体、それに私が惹きつけられる理由を探り、そこから 21 世紀において哲学という営みに携わる我々が学びうる何かを引き出そうと試みることにある。そうした試みにおいて、私は彼の哲学の仕方をイロニーとして理解したい。そして彼という存在そのものを、キルケゴールの概念<sup>1</sup>を援用し、転換期を生きた「イロニー的な主体」として理解したい。こうした考察はウィトゲンシュタインの科学に対する独特の態度の意味にも光を当てるものであり、科学と哲学の関係を考察する上でも意味を持つものであると思われる。

### 2. イロニーとしてのウィトゲンシュタインの哲学的実践

「哲学」という営みに関する通念からするとウィトゲンシュタインの「哲学の仕方」は特異であり、同時に否定的である。通念に従えば哲学という営みは、何らかの哲学的問題に対する解やその説明、あるいはそれらを導く理論や世界観を言語化し、書物等の媒体を通じて哲学者共同体や公衆に広く提示することを根幹とするように思われる。それに対してウィトゲンシュタインは、「本来の哲学の正しい方法は、語られうること、従って自然科学

---

<sup>1</sup> S. キルケゴール『イロニーの概念』第二部「イロニーの世界史的妥当性、ソクラテスのイロニー」、飯島宗享他訳『キルケゴール著作集 2 1 イロニーの概念(下)』白水社、新装復刊 1995, pp.175-196.

の命題、従って哲学とは何の関係もないこと、これ以外の何も語らない、というものである」(『論考』6.53、奥雅博訳、以下同様)とか、「哲学はまさにあらゆることを立言するだけであって、何事も説明せず、何事も推論しない」(『探究』§126、藤本隆志訳)といった言葉に象徴されるように、生涯通念的な哲学のあり方には否定的態度を取っていたように思われる。しかしそれは彼が哲学を有害なものとみなし、その撲滅のために活動したということではなく、通常の哲学的活動に対して否定的関係を持つ哲学、いわば否定的哲学、あるいは反哲学的哲学<sup>2</sup>というべきものを実践しようとしていたということであり、それは自分の著作の表題に「哲学」という語を肯定的な意味で繰り返し用いていることのうちにも示されている。更に、彼がこうした否定的哲学を実践しようとしたのは、哲学の固有の領域が次第に科学によって侵食されてゆくという歴史認識<sup>3</sup>に基づいてのことでもない。哲学は徐々に科学に取って代わられてゆくといった思想を彼は表明していない。

この奇妙で不可解なウィトゲンシュタインの否定的哲学の意味を明らかにするひとつの手がかりが「イロニー(皮肉)」という概念だと思われる。イロニーを特徴付けるのは否定性、すなわち真意と表層の言葉の対立である。より具体的に言えばイロニーには二つの型がある<sup>4</sup>。第一は自分が重要だとか価値あるとか思わないものについて、それを評価するかのように語ることであり、その目的は対象の無価値さをより徹底して明らかにすることである。知を豪語するソフィストに対してソクラテスが、自らは無知を装いながら対話を進めるときに彼が取った戦略はこのタイプのイロニーである。これを肯定的イロニーと呼ぼう。第二は自分が真に価値あり重要だと思う対象に対して、それが大したものではないかのごとく語ったり、その本来の価値に見合うだけの言葉を費やさなかったりすることである。ソクラテスが若者たちに自分の知を「無知の知」としてのみ提示したときに彼が用いたのがこのタイプのイロニーである。人がこうした戦略を用いるのは、自分が真に価値あると思うものが自分の現在の理解や知識を無限に超越していると感じるとき、そうした対象が安易な言語化によって有限化されたり切り縮められるのを避けるためである。ソクラテスは自己をどこまでも無知という場に留めておくことにより、無限の営みとしての哲学の可能性を切り開いたといえるだろう。これを否定的イロニーと呼ぼう。

これら二つのイロニーの概念を『論考』期<sup>5</sup>のウィトゲンシュタインの哲学観に適用し、

---

<sup>2</sup> クワインやローティエの名を挙げるまでもなく今日の我々にとって反哲学的哲学はもはや珍しいものではない。しかしそれらの大半がウィトゲンシュタインの「哲学の仕方」の直接・間接の影響の下に生じたということ、そしてこうしたある意味で矛盾した活動の正体は何か、それをあえて実践する意味は何か、という基本的問題に対する明確な答えはいまだ与えられていないことを忘れるべきではない。

<sup>3</sup> 他方 J. L. オースティンはこうした歴史認識に基づいた哲学観を持っていた。坂本百大監訳『オースティン哲学論文集』勁草書房、1991、p.372 参照。

<sup>4</sup> cf. キルケゴール前掲書、p.157.

<sup>5</sup> ここで議論を『論考』期に限定するには二つの理由がある。先ず『探究』期については全てがあまりにも不透明であり、確固としたことを語るのが困難であること、第二に、『探究』期の哲学観について語るためには、先ず『論考』期の哲学観をできるだけ明らかにし、

彼の否定的哲学の意味の解明の手がかりとしたい。まずは肯定的イロニーから。上で引用した 6.53 の「自然科学の命題、従って哲学とは何の関係もないこと」という表現は、自然科学の内容それ自身が哲学的には無意味・あるいは無価値であるとウィトゲンシュタインがみなしていたことを示している<sup>6</sup>。それゆえ哲学が述べることは自然科学をおいてはない、と彼がいう時、それは肯定的イロニーであり、自然科学の哲学的価値に関して間接的だが深い批判が示されていると考えられる。同様に、「哲学の目的は思想の論理的明晰化である・・・哲学の結果は「哲学的諸命題」ではなく、諸命題が明晰になることである」(4.112) といった言葉で表されている「概念の論理的分析と明晰化が哲学の仕事である」という哲学観も肯定的イロニーの対象であると理解しなければならない。これは「分析哲学」という理念の源泉であり、それを実践している者の立場からすればイロニーではなく真剣な概念であるはずのものだが、哲学という観点に立ち返って考えるならやはりイロニーといわざるを得ないものである<sup>7</sup>。ここでウィトゲンシュタインが「思想の論理的明晰化」として意味しているのは、例えば、ソクラテス対話篇でなされている理念の探求（あるものの本来のあるべき姿の探求）ではなく、単に形式的な知的作業であり、究極的には理想的な辞書作成へと収斂するようなものである。それはあらゆる分野の学問にとって必要な準備的作業ではあるが、特に哲学に関わるものではない。各学問分野の論点整理を行うことが哲学の本来の任務であると考え理由は見当たらない。概念の論理的明晰化が哲学本来の目的と無関係であるとウィトゲンシュタインが考えていたことは、現に彼がその著作で行おうとしていた作業がそうしたものではなかったことに最もよく示されていると言えるだろう。

次に否定的イロニーに移ろう。ウィトゲンシュタインにおいてソクラテスの「無知」に対応するのが「沈黙と示し」である。ソクラテスが「無知の知」によって哲学的真理を安易な限定から守ったように、ウィトゲンシュタインは「沈黙と示し」によって「語りえぬもの」(と彼が呼んだ最も重要なもの)を言語的有限化や通俗化から守ろうとした。このことは改めて論じるまでもないと思われる。我々がここで否定的イロニーと呼んでいる過程は、次のようなテキストに明瞭に示されている。

4.114 哲学は思考可能なものを限界づけ、これにより思考不可能なものをも限界づけねばならない。

4.115 哲学は語りうることを明晰に描出することによって、語りえぬことを意味するであろう。

---

その上でそれがどの程度、どのように変化したかを解明する必要があること、である。

<sup>6</sup> cf.4.1121,4.1122.

<sup>7</sup> 「分析哲学」には二重のイロニーが含まれている。ウィトゲンシュタインがイロニーで「これが哲学だ」と言ったことを真剣に受け取り、それを本気で実践したというイロニーである。あるいはそれをイロニーとして実践した分析哲学者もいるかもしれない。その場合「分析哲学」は「ロマン派」に比すべき屈折した性格を持つことになるだろう。

6.522 だがしかし表明しえぬものが存在する。それは自らを示す。それは神秘的なものである。

7 話をするのが不可能なことについては、人は沈黙せねばならない。

### 3 . イロニー的主体としてのウィトゲンシュタイン

以上の考察に何がしかの妥当性があるとして、そこからウィトゲンシュタインの哲学について我々に有意味などのような結論が引き出せるのだろうか。以上の分析が示しているのは、我々がウィトゲンシュタインに惹かれる大きな理由は、彼の哲学が同時代の哲学者には見られないイロニーの色彩を深く帯びていることだ、ということである。問題はなぜ彼がそうしたイロニーを行ったのか、あるいは行わざるを得なかったのかである。周知のようにウィトゲンシュタインは特異なパーソナリティーを持っていた。もし彼のイロニーがこうしたパーソナリティーに淵源を持つものならば、それは個人のエピソードに留まり、哲学にとって大きな意味を持ち得ないことになる。こうした困難に光を投げかけるヒントがソクラテスとの対比である。ソクラテスのイロニーは彼の性格の産物というよりは、複雑な知的戦略というべきものであり、その後の哲学史に決定的な影響を及ぼした重要な行為である。もし上述のようにウィトゲンシュタインがイロニーの人であるなら、彼はソクラテスと並ぶ哲学史上の特異な存在ということになり、ソクラテスに比すべき重要な哲学史的意味を持つことになる。この意味の解明は簡単な作業ではないが、その手がかりとなるものとしてキルケゴールの、転換期に現れるイロニー的な主体、という概念を取り上げ、ウィトゲンシュタインに適用してみたい。転換期とイロニー的な主体についてキルケゴールは次のように書いている。

歴史上のこうした転換期のそれぞれに、注目すべき二つの動きが存在する。一方においては新しいものを進出させ、他方においては古いものを駆除しようとするのである。新しいものを進出させようとするかぎり、われわれはここで、新しいものはるか遠方に、ほの暗い、定かならぬ輪郭において直観するところの、預言者の人物に出会う。預言者の人物は、来るべきものを所有するのではなく、単にそれを予感するのである。彼はそれを通用させることができないばかりか、彼が属する現実にとっては彼は失われた者でさえある。とはいうものの、彼のこの現実に対する関係は平和的な関係である。それというのも、あたえられた現実がなんら対立者を感じないからだ。次に出てくるのが本来の意味での悲劇的英雄である。彼は新しいもののために戦う。彼は、彼にとっては消滅してゆくものであるものを滅却しようと努める。もっとも、彼の任務は滅却することよりもむしろ新しいものを通用させて、それによって間接的に過去のもを滅却することである。しかし他面において、古いものを駆除しようとするならば、古いものは全くその不完全性において見られなければならない。ここでわれわれはイロニー的な主体に出会う。イロニー的な主体にとっては、あたえられた現実こそ

の妥当性を全く失ってしまっている。その現実、彼にとっては、いたるところで人をうんざりさせる不完全な形式となってしまう。しかし、他面において、彼は新しいものを所有してはいない。彼は、ただ、現にあるものがイデーに相応しないということだけを知っているのである。・・・いかにもイロニーの人は或る意味で預言者的である。彼はつねに未来の何ものかを指し示すからである。しかしそれが何であるかを彼は知らない。・・・イロニーの人は同時代の隊列から踏み出ており、それに立ち向かう関係にある。来るべきものは彼には隠され、彼の背後に横たわる。しかし、彼が敵対的にそれに直面して立つ現実、彼が滅却すべきものであり、彼の食い入るようなまなざしがそれに向けられている<sup>8</sup>。

イロニー的な主体とは、時代と思想の大きな転換期にあつて、来るべきものを予感しつつもそれが何であるかをいまだ全く知らず、それゆえそれについて明瞭に語れず、同時に、去るべき古きものの非妥当性を時代の大勢に反して限りなく強く感じる者、しかしその非妥当性をずばり言い表す言葉（それは同時に来るべきものを限定しうる言葉でなければならぬがゆえに）をいまだ持たない者である。ウィトゲンシュタインがこうした意味でのイロニー的な主体であることの厳密な証明はこの小論の及ぶところではないが、キルケゴールの力強い叙述は、我々が惹かれてやまないウィトゲンシュタインの側面を鮮やかに描き出しているように思われる。それは一種の予言的響きさえ持っているように思われる。ここではウィトゲンシュタインのイロニー的な主体という側面を示す彼の言葉、自己と時代に関する彼自身の言葉を引用するに留めたい。

この書物は、その精神に対して友好的に立ち向かってくれるような人々のために書かれている。その精神は、我々全員をとりまいてるヨーロッパ文明とアメリカ文明の巨大な流れの精神とは異なっている。この文明の巨大な流れの精神は、進歩において、増大し続けますます複雑になっていく諸構造を形づくることにおいて現れるが、本書の精神は、いかなる構造であれその明晰さと見通しのよさを求めて努力することに現れる。あの文明の精神は世界をその周辺部によって その多様性において 把握しようとするが、本書の精神は世界をその中心において その本質において 把握しようとする。従つて文明の精神は諸形象を次々と相並べ、いわば各段階を次々とあがってゆくのに対し、本書の精神は自らが位置するところに留まり、そして同一なものを常に把握しようとするのである<sup>9</sup>。

#### 4．我々の時代における哲学のあり方

ウィトゲンシュタインの「哲学の仕方」に関する以上の考察から、我々自身が今の時代に

<sup>8</sup> キルケゴール前掲書、pp.177-179.

<sup>9</sup> 奥雅博訳『哲学的考察』序文。

あってどのように哲学をなすべきかについてどのようなことが引き出せるかについては、ワークショップにおいて参加者と共に考察したい。